

ロビンソン・クルーソーの経済と現代資本主義経済
～実物体系からの景気循環論または不均衡動学～
泉 宏明
(NEC広島)

キーワード：自我の対立 財の数を n にFIXしたときの飽和消費の存在の仮定
労働の質の問題 プロセスイノベーションとプロダクトイノベーション
自己生産自己消費経済と自由放任主義交換経済 労働時間の下方硬直性

1. 序

『経済学はロビンソン物語を愛好する.』と述べたのは、マルクスであった。(資本論 第1巻第1篇第1章第4節) その後も、ロビンソン物語は、経済学において何度も顔を出す。私が大学時代、独学で経済学を学んでいた頃の教科書「サムエルソン 経済学 原書第11版」にも登場した。

ロビンソン物語と現代の資本主義経済を本質的に同じととらえるか、違うととらえるかは、各人各様である。サムエルソンは教科書「経済学」の中で、『意識的な計画化がなくとも、競争市場は、もっとも効率的な資源配分をロビンソン・クルーソーや計画当局者と同じように達成することができるのだ。』(「経済学」原書第11版第23章)と述べた。

ロビンソン・クルーソーの経済と現代の資本主義経済あるいは完全競争の経済は、本質的に同じなのであろうか。私は違うと考える。ロビンソン物語には、失業という概念はでてこない。それは、確かに、ロビンソン・クルーソーが英知に富み、また自然豊かな島に流されたという事実にもよるだろう。しかし、20世紀を顧みると、1929年の世界大恐慌という歴史があった。また、1996年時点の日本では、平成不況により失業率がいまだに高く、特に新卒採用は「超氷河期」と呼ばれている。

本稿において、ロビンソン・クルーソーの経済、歴史的な存在としては「共同体」および「封建制」という自己生産自己消費経済と、自由放任主義交換経済の違いを、新しい分析装置(経済モデル)を提示することにより明らかにし、実物体系からの景気循環論あるいは不均衡動学を論じてみたい。その分析装置において重要なのは「自我の対立」という概念と「企業家による消費空間の次元の深化」という「労働の質」の問題である。

2. 人間とは何か

ロビンソン・クルーソーの経済、歴史的な存在としての「共同体」および「封建制」の構成員である人間と、現代の資本主義社会の構成員である人間とは、そう大差無いものとするところが、議論をする上の前提であろう。

それでは、人間とは如何なるものであろうか。ここで、近代経済学に見られる「経済人(ホモ・エコノミクス)」というものを見ていこう。

『ホモ・エコノミクス みずからの利益を最大にすることだけを基準として行動する人間。(岩波「経済学小辞典」より)』

このような人間像は資本主義成立以降の個人主義・功利主義から生まれたものである。しかし、本稿ではもう少し広く人間というものをとらえたい。

人間とは、

1. 「生きる」ために「生きる」。
2. 種族保存本能を持つ。
3. 自然を利用し生産手段を開発し使用する能力を持つ。
4. 自我を持つ。

この4点を持ったものを、本稿における人間とする。

3. 集計量

歴史的に見れば、経済は、有史以来、自己生産自己消費という経済と、他人のためのものを生産し交換し自らの効用を満たすという交換経済の二つの経済社会を持っていた。古くは原始共同体の世界においても、人間の必需品である塩の交換が行われていた。しかしながら、その二つの経済体の生活規定の度合は、昔と今とは違うはずである。それをどのような尺度をもってはかるべきであろうか。ここでマルクスが最終的にまとめあげた労働力という集計量に注目してみよう。

マルクスは労働の二重性を説く。

『・・・このようにその有用性とその生産物の使用価値に、またはその生産物が使用価値であるということに、表わされる労働を、われわれは簡単に有用労働と呼ぶ。』いわゆる具体的有用的労働である。(資本論 第1巻第1篇第1章第2節)

『ある商品がどんなに複雑な労働の生産物であっても、その価値は、その商品を単純労働の生産物に等置するのであり、したがって、それ自身ただ単純労働の一定量を表わしているにすぎないのである。』いわゆる抽象的人間的労働である。(資本論 第1巻第1篇第1章第2節)

次に、ケインズの集計量を見てみよう。

『したがって、雇用理論を取り扱うに当たって、私はただ二つの基本的な数量単位、すなわち貨幣価値量と雇用量のみを使用することを提案する。このうちの第一のものは厳密に同質的であって、第二のものもまた同質的にすることができる。なぜなら、等級および種類を異にする労働や有給の仕事が多かれ少なかれ固定的な相対的報酬を受け取っているかぎり、通常労働の一時間の雇用をわれわれの単位としてとり、特種労働の一時間の雇用をその報酬に比例してウェイトづけることによって、すなわち、通常率の二倍の報酬を受ける特殊労働の一時間は二単位として数えることによって、雇用量はわれわれの目的にとって十分満足に定義されるからである。』(雇用・利子および貨幣の一般理論 第2編第4章の三)

マルクスが労働に対し労働時間といった集計量を用いたのに対し、ケインズは貨幣表示の労働という集計量を用いたのである。

ここで、次の点が問題となる。

1. 労働の量と質の問題。マルクスもケインズもいかなる労働も等質の労働に等置できると考えたが、これは事実であろうか。質は量に還元できるかという問題である。

2. 労働の生産手段間移動の問題を考えなければならないのではないか。資本主義の矛盾の一つである過剰生産に対し、労働力の移動は圧倒的に遅いという事実である。

3. マルクスあるいはマルクス以降のマルクス経済主義者は、社会的必要労働と必要労働の区別を行っていないが、この二つはまったく別ものである。

この3点は後に強調されるであろう。本稿では、集計量を次のとおり考慮して定める。自己生産自己消費の社会と交換経済の社会との両方に使える集計量として、労働時間による集計だけではなく、限界革命という経済上の大きな変革から効用ということも重視しなければならない。そこで、どのような効用物の生産の上に生活しているかで人間を振り分け、その人口を集計量とする。

4. 経済モデル

4. 1 基本的な考え方

自由放任主義交換経済とはいかなるものかを考えるために、簡単な経済モデルを構成する。ただし、定量的モデルではなく定性的モデルである。そこでは、生産空間と消費空間というものを考える。消費空間においては、効用理論を使う。生産空間においては、労働の量を基本に置きながら質の問題も考慮する。自由放任主義交換経済の発展を生産空間と消費空間の交差により特徴づける。

4. 2 生産・消費サイクル

この章では、資源問題、環境問題については考えない。
 生産・消費サイクルを図示する。

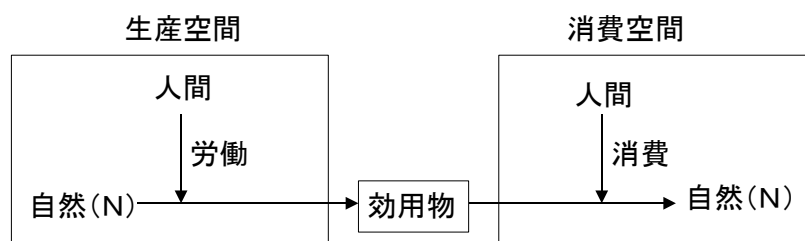


図1 生産・消費サイクル

(図の説明) 自然は人間の労働という行為により効用物に変化する。この過程を生産空間と呼ぶ。その効用物は人間の消費という行為によりまた自然に帰する。この過程を消費空間と呼ぶ。なお、この両過程において自然は一定であり、希少であると仮定しておく。

4. 3 消費空間

消費空間を特徴づけるため効用理論を使うのだが、まず効用理論が、現代の近代経済学、マルクス経済学においてどのような立場にあるか見ていこう。

近代経済学にあつては、効用理論は均衡論を展開する道具となっている。また、サムエルソン等はさらにその均衡の安定性を追及した。

マルクス経済学にあつては、効用理論は激しく非難されている。例えば、大月経済学辞典の効用価値説の項を読むと次のように書かれている。

『効用価値説 : . . . 効用価値説の問題点は、(1) 基本的には資本主義的生産関係、つまり低賃金の労働者と膨大な剰余価値を搾取する資本家という価値関係が効用(非効用)の規模を規定していることを否定し、価値→効用ではなく効用→価値とさかさまにとらえている点、(2) 一般的等価値としての貨幣の価値を規定できない点、(3) 限界効用学派の経済像は、効用の通増的な発展を否定して限界効用逡減を想定する(この想定がないと効用の極大は保障されない)という停滞性を持つ点などである。』

本稿では、マルクスがあまり考慮しなかった、社会的に必要な労働とは如何なるものを明確にし、また近代経済学が用いるような均衡解の存在および安定性ではなく、マクロ動学に限界効用逡減の法則を用いることにより、その不安定性およびそこから発生する経済的活力を導くことによってマルクス経済主義者の見解を退けよう。

さて、それでは効用理論を用いて消費空間を構成しよう。効用理論には、基数的効用理論と序数的効用理論がある。過去には、基数的効用理論がよく用いられていたが、今日では序数的効用理論がよく用いられる。本稿でも、現在一般的な序数的効用理論を用いよう。これを用いるため「擬順序」という数学的概念を導入する。

「擬順序」とは、集合 S があつた場合で、 $x, y, z \in S$ のときに、関係「 \leq 」に対して次の二法則が成り立つものをいう。

(1) 完備法則 : $x \leq y$ または $y \leq x$ のうち少なくとも一方が成立する。

(2) 推移法則 : $x \leq y$ かつ $y \leq z \Rightarrow x \leq z$

さらに次の法則を満たすとき、「順序」と呼ぶ。

(3) 反対称法則 : $x \leq y$ かつ $y \leq x \Rightarrow x = y$

「順序」には実数、自然数の自然な構造等がある。

この章において「財」は n 財であるとし、そして、消費者 m 人それぞれに対して、 n 財の効用は独立であり、「直行基」を為すものとする。 n 財の組み合わせ w については、

$$R_n^+ = \{ (x_1, x_2, \dots, x_n) \in R_n \mid x_1 \geq 0, x_2 \geq 0, \dots, x_n \geq 0 \}$$

と定義すれば $R^+_n \ni w$ とみなされる。

m 人の消費者それぞれに対して、一定期間における消費可能集合 S_i ($1 \leq i \leq m$) は次の性質を満たすものとする。

- (1) S_i は D_n (n 次元球) と同相で、convex な n 次元コンパクト多様体である。
- (2) S_i の中に選好関係という擬順序「 \leq_i 」が定義される。
- (3) その選好関係は $(0, 1) \ni t$ ，および $x, y \in S_i$ に対して $x \sim_i y$ を $x \leq_i y$ かつ $y \leq_i x$ と定義するとき、異なる2点 x', y' に対して $x' \sim_i y' \Rightarrow (1-t) \cdot x' + t \cdot y' >_i y'$ が成立する。つまり、同効用曲線がconvexであることを仮定する。
- (4) $0 \in S_i$
- (5) 集合 S_i において \sim_i は同値関係となる。この同値関係による商集合を S_i / \sim_i とし、 $x, y \in S_i$ の同値類 $[x], [y]$ に対して $[x] \leq_i [y]$ を $x \leq_i y$ の時と定義すれば、 \leq_i は S_i / \sim_i の順序関係となる。この時、

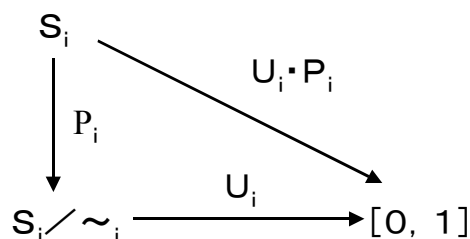


図2 効用関数の存在の仮定

上図の連続な順序同型写像、 U_i が存在する。（ $U_i \cdot P_i$ を「効用関数」と呼ぶ。）

以上の(1)～(5)が S_i に成り立つものとする。ここで、以上の仮定より、 S_i の選好関係において最大効用点が存在し、それは唯一点のみであることが、ただちに明らかになる。

この場合、 $S = \sum_{i=1}^m S_i = S_1 + S_2 + \dots + S_m$ (線型空間の和) を考える時、 $S_1 = S_2 = \dots = S_m$ であり S の選好関係が、 S_1 と線型に定まるものとする。つまり人間の消費行動はよく似たものであることを仮定する。

すなわち、消費空間における消費者全体の消費可能集合 S は、選好関係が定義でき、その選好関係は、限界効用逓減の法則を満たすものとする。

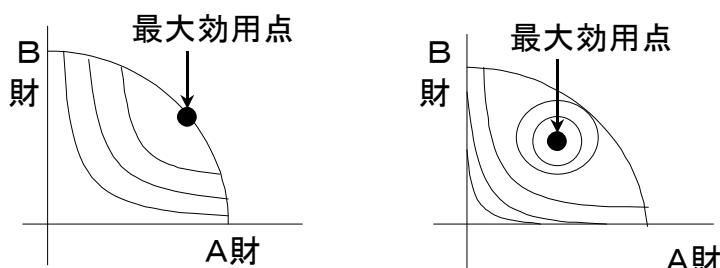


図3 仮定を満たす消費空間の2つの例

4. 4 生産空間

普通、生産関数は次のように定義される。

$$y = F(l, k, t)$$

y : 総生産量

l : 労働投入量

k : 資本ストック

t : 時間

かつ $y_t \geq 0$

ここで問題なのは、資本ストックである。「資本」という概念は、学者により多様な意味に使われる。また、ジョーン・ロビンソンは「資本」を集計量として扱うことに対して懐疑的であった。(ケンブリッジ=ケンブリッジ論争)

本稿では、資本ストックを用いず、そのかわり自然(=資源)という概念を用いる。

つまり、

$$y = F(l, n, t)$$

n : 自然

仮定より自然は一定であるので

$$y = F(l, t)$$

となる。

ここで時間 t を固定したときの $Y = F(L)$ を考える。

まず、労働投入量の集合 L を考える。労働投入量を平均化された労働の労働時間としてのはかる。その時、労働投入量の集合は R_n^+ 内の点の集合とみなされ、下図のように表される。

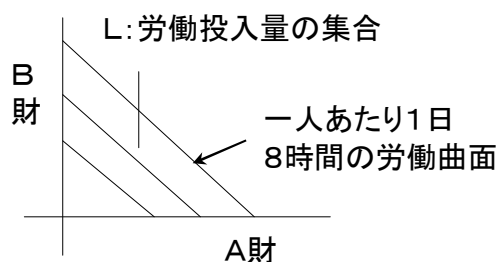


図4 労働投入量の集合

この時、一人あたり1日の労働時間は、0時間から24時間までの値をとるが、肉体の再生産のため24時間労働というのは無理である。つまり、最高は肉体の再生産が可能な労働時間となる。今日では、労働運動の中で一つのルール、例えば8時間労働等が形成された。(これは自由放任主義とは、若干質の異なるものであろう。)ここでは、8時間労働を最大労働時間としておき、一定期間に可能な労働投入量の集合 L の中に、平均化された労働の総労働時間が一定な点を結んでできる曲面を考えると、総労働時間の大小により、「擬順序」が定義される。

つまり、 X_1 財, X_2 財, ..., X_n 財それぞれに投入された労働時間を l_1, l_2, \dots, l_n とすると、

$$l_1 + l_2 + \dots + l_n = h$$

となる (l_1, l_2, \dots, l_n) の集合が作る曲面を考え、その合計(つまり h)の大小により「擬順序」を定義する。

次に t_0 時の $F: L \rightarrow Y$ を考える。集合 Y は一定期間に生み出される、 X_1 財, X_2 財, ..., X_n 財の生産量の集合である。 F は次の性質を満たすものとする。

(1) 集合 L という n 次元コンパクト多様体を集合 Y という $convex$ な n 次元コンパクト多様体に写す同相写像である。

(2) F は集合 L の「擬順序」を同型に集合 Y の中に生み出し、その「擬順序」は、 $(0, 1) \ni t$ および、異なる2点 $a, b \in Y$ に対し、

$$a \sim b \Rightarrow (1 - t) \cdot a + t \cdot b < b$$

が成立する。

つまり、集合Lの中の平均化された労働の労働時間が一定な点を結んでできる曲面を、同相写像Yの中に写した曲面が、concaveであることを仮定する。

$$(3) \quad F(0) = 0$$

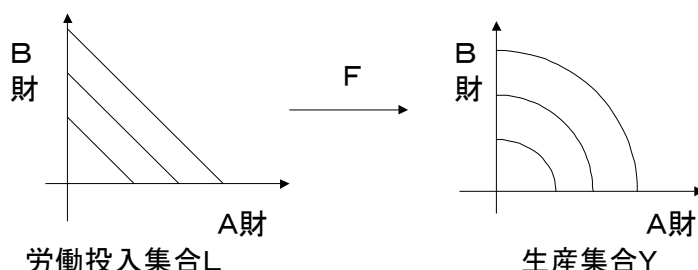


図5 写像F

4. 5 生産空間と消費空間の関係

ここで、労働の質に関連して、シュンペーターの「新結合の遂行」を考えてみよう。

シュンペーターは、新結合の遂行という概念に五つの場合を含ませている。

- (1) 新しい財貨、すなわち消費者の間でまだ知られていない財貨あるいは新しい品質の財貨の生産
- (2) 新しい生産方法、すなわち当該産業部門において實際上未知な生産方法の導入
- (3) 新しい販路の開拓
- (4) 原料あるいは半製品の新しい供給源の獲得
- (5) 新しい組織の実現

これらを実行する人間を、シュンペーターは「企業家」と呼んだが、本稿のモデルではこれらを労働の質の問題として取り入れる。

つまり、労働を次の3つに分類する。

- (1) 単純再生産労働（第1の労働）
- (2) 生産性の向上により、生産集合Yを拡大させる労働（第2の労働。一般的にはプロセスイノベーションと呼ばれるものに対応する。）
- (3) 今までにない効用を与える新たな財を生み出すことにより、消費可能集合をn次元コンパクト多様体からn+1次元コンパクト多様体に変化させる労働（第3の労働。一般的にはプロダクトイノベーションと呼ばれるものに対応する。）

本稿で特に強調したいのは、第3の労働である。この労働が、本稿の経済発展の見方である自由放任主義交換経済の深化を行う。

さて、自由放任主義交換経済は、自我の完全な解放であると定義することができる。自我の完全な解放を、自由と定義するならば、まさしく自由主義社会である。

しかし、自我の解放は、交換を媒介として自我の対立となる。競争社会である。自己生産自己消費経済の場合（経済学でよく例に出されるロビンソン・クルーソーの場合）においては、労働時間をも含めて最大効用をもたらすように生産・消費行動を行う。しかし自由放任主義交換経済の場合、生産者および消費者それぞれの立場の中で自我の対立が生じるばかりでなく、生産者対消費者という関係においても自我の対立が生じる。生産者としては、他の生産者との利潤獲得競争において、平均化された労働時間が他人よりも少ないということは、他の生産者に比べて自らの利潤が少ないことを意味し、結局労働時間が最大労働時間にならざるを得ない。また、消費者としては、生産者が失業しようがすまいが、自らの一定期間の効用（生産者の労働時間を考慮しない）を最大化する行動を行う。まさしく、効用物を中心において生産者と消費者が、その構成員が同じ人間であるという事実

にもかかわらず、分裂し相対しているのである。

このようにして、自由放任主義交換経済の場合、労働時間は労働投入量の集合 L のバウンダリー上、つまり最大労働時間の曲面に定まる。そして、それは関数 F により、生産集合 Y のバウンダリーである $n-1$ 次元コンパクト多様体 (∂Y) 上に写され、ここで生産が常に決定される。それに対し、消費行動は消費可能集合 S の任意の点で決定される。つまり、生産は $n-1$ 次元コンパクト多様体上で決定されるのに対し、消費は n 次元コンパクト多様体上で決定される。この次元の差が、自己生産自己消費の場合、つまり生産も消費も n 次元コンパクト多様体の任意の点で決定される場合との、決定的な違いを与える。自己生産自己消費社会の場合、第2の労働（つまり生産集合 Y を拡大させる労働）が行われ、生産集合 Y が、消費可能集合 S の最大効用点 s_0 を内点に含むようになった時でも、労働時間を短縮することにより、（つまり L の内点で生産を決定させることにより）最大効用をもたらす生産を得る。あるいは、この場合、労働の苦痛というものを考え、さらに労働時間の短縮をはかるかもしれない。

それに対し、自由放任主義交換経済の場合、 Y の中に s_0 を含まない時は、 ∂Y 上でかつ効用を最大にする点で生産が決定される。

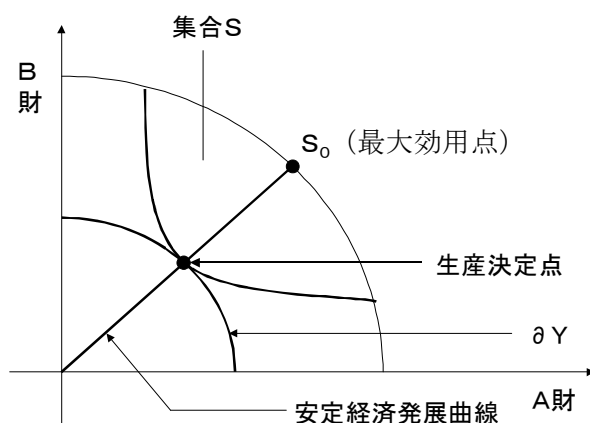


図6 生産空間と消費空間の交差

しかし、第2の労働が、この競争社会の中で、積極的に行われ、ついには s_0 が Y の内点になる。この時も、 ∂Y 上で生産が決定されるが、最大効用点 s_0 が Y の内点にあるので、集合 L の縮小を行い、つまり失業者を作ることによって、

$\partial F(L') \ni s_0$ (L' は、 L から何人かを排除、つまり失業させることによって総労働時間を縮小させた労働投入集合) となるような経済行動を行う。しかし、失業者を作り出し、 L の縮小を行うと、同時に消費可能集合 S も縮小してしまう。（この時の消費可能集合を S' とし、最大効用点を s' とする。）この場合、

$$\partial F(L') \ni s'$$

とは限らない。 s' は $F(L')$ のさらに内点にあるかもしれないため、さらに失業を生み出すことになる。（負の加速度原理）これが、自由放任主義交換経済の最大の特徴である過剰生産不況である。あるいは、恐慌と呼ばれる状態にまで陥るかもしれない。

これを解決する唯一の自由放任主義的な経済行動は、第3の労働、つまり今までにない効用を与える財を生み出すことにより消費可能集合を n 次元コンパクト多様体から $n+1$ 次元コンパクト多様体に変化させる労働を行うことである。このように財が一つ増すと、その消費可能集合は、急速に新しい $n+1$ 次元コンパクト多様体を作り、その形状が定まる。それに対応して労働が相対的に遅れて新たな財の生産に移動していく。それにより、

不況が解決され、新しい安定経済発展曲線を作っていくのである。

4. 6 貨幣観とスタグフレーション論

本稿で長期マクロ経済学を行う場合の貨幣論は、古典的である。つまり、貨幣は中立であるとする。

本稿において重視するのは、いわゆる実物体系であり、その相対価格である。貨幣はヴェールである。ここからスタグフレーション論を展開してみよう。

まず、貨幣の交換方程式が成立する。

$$M \cdot V = P \cdot T$$

M : 貨幣の供給量
 V : 貨幣の流通速度
 P : 物価水準
 T : 取引量（相対価格のみに依存する。）

(1) V 一定、 T 一定の場合

P は M に比例する。つまり不況時でも M を増加すれば、 P は上昇する。（貨幣供給量の増大によるスタグフレーション）

(2) T 一定、 M 一定の場合

P は V に比例する。 V は制度的、心理的影響により変化する。例えば、「グレシャムの法則」（悪貨は良貨を駆逐する。）がある。これは、きれいな貨幣は自分の手元に置き、きたないものは早く手放す、という心理が働き、その貨幣の流通速度の差により悪貨が良貨を駆逐するというものである。日本では、貨幣の改悪は、江戸時代、幕府が財政困難になった時によく行い、物価水準が急速に上昇した。

(3) M 一定、 V 一定の場合

$$P = c / T \quad c : \text{一定}$$

不況時には、一般に取引量は需要の減退により縮小する。よって物価水準は上昇する。ここで、

$$T = \lambda \cdot (G - q)$$

λ : 正の定数
 G : 総人口で一定
 q : 失業者数

が成り立つとすれば、 $P \cdot T = c$ より時間 t で微分して、 $P_t = (\lambda \cdot P / T) \cdot q_t$ が成立し、失業者数が増大すれば物価水準が上昇し、失業者数が減少すれば物価が下落する、というユニークな結果を得る。これは、マネタリストが「オークンの法則」という実証的定理より導いているスタグフレーション論に対応するものである。この時いわゆるフィリップス曲線、つまり失業者数と物価水準の関係を表すグラフは、右上がりとなる。

5. 結び

私が経済学を学ぶことの最終目的は、歴史および経済を一つの体系として把握することにある。そのために、人間論から始めた。この人間論には反発も多いかもしれない。人間はもっと複雑であり様々な行動をとると主張するだろう。しかし、科学とは、いかに単純な仮定から、いかに有意義な結論を導き出すかであることを考えれば、本稿での態度は正当であろう。そして、第3章集計量においては、マルクスおよびケインズ両者があまり考慮しなかった労働の質の問題をクローズアップしておいた。これは、第4章の経済モデルの中に有効な形で取り込まれている。労働の質をモデルの中に取り入れたものはそう多くはないはずである。また、ケインズとの比較において、ケインズが労働に対して貨幣賃金の下方硬直性があると主張したのに対して、本稿では労働時間の下方硬直性があったとした。最後に経済モデルの中で消費可能集合をコンパクトとした点について若干考察しておこう。従来のミクロ静学としての経済学では、普通、消費空間は無有限大である。しかし、卑近な

例で申し訳ないが、ゲームソフトを例にとりて考えて見よう。ゲームソフトを買おうとしている消費者が1万円持っているとする。1本のゲームソフトが1万円ならば1本買うだろう。1本のゲームソフトが1000円ならば10本買うだろう。10円ならば1000本買うだろう。これが、従来のミクロ静学を極端に表現したものである。これは、本稿で用いた「消費」とは違う。本稿での「消費」とは自然に帰する運動である。つまり、次のような考え方が本稿の態度である。1本のゲームソフトを使用するのに（「消費」するのに）1日1時間かかるとする。そうすると、消費者はお金をいくら持っていたとしても、最大24本しかゲームソフトを買わないであろう。これが、消費空間がコンパクトであるという所以である。そして、短期ミクロ経済においては、従来のミクロ静学が扱ったような買う（「消費」というよりもこの言葉がふさわしい）という行為があるかもしれない。しかし、中長期マクロ動学においては、買うという行為が消費するという行為に収束し、本稿で述べたように消費空間がコンパクトになるのである。

以上をもって本稿の概観および結びとしたい。

[参考文献]

- [1] ドブリュー. G (1977) 『価値の理論』東洋経済新報社 丸山徹訳
- [2] 平田清明 (1980) 『コンメンタール「資本」1』日本評論社
- [3] ケインズ. J. M (1983) 『雇用・利子および貨幣の一般理論<ケインズ全集7>』東洋経済新報社 塩野谷裕一訳
- [4] マルクス. K (1968) 『資本論』大月書店 大内兵衛, 細川嘉六訳
- [5] 森嶋通夫 (1974) 『マルクスの経済学』東洋経済新報社 高須賀義博訳
- [6] 大月経済学辞典編集委員会 (1979) 『大月経済学辞典』大月書店
- [7] 佐藤隆三 (1982) 『ニュー・マクロエコノミクス』マグローヒルブック株式会社
- [8] シュンペーター. J. A (1977) 『経済発展の理論 上・下』岩波書店 塩野谷裕一, 中山伊知郎, 東畑精一訳
- [9] 都留重人編 (1981) 『岩波経済学小辞典』岩波書店
- [10] サムエルソン. P. A. (1981) 『経済学 原書第11版』岩波書店 都留重人訳
- [11] 泉宏明 (2001) 『資本主義の生成 ～封建制から資本主義への移行理論～』「進化経済学論集 第5集」 進化経済学会第5回福岡大会運営委員会編集

(注) 本稿は1985年に筆者が大同生命保険相互会社に在職中に執筆した論文『資本主義の生成と初期の構造 ～封建制から資本主義への移行理論～』のうち、都合により経済理論のみを抽出し、独立の論文としたものである。

The Robinson Crusoe's Economy And The Modern Market Economy
～Real Business Cycles Or Disequilibrium Dynamics～

Hiroaki Izumi
(NEC Hiroshima)

Abstract. Many famous economists mention the story of Robinson Crusoe in their works. But the evaluation about the difference between above two economic structures is various.

We think that the one is essentially different from the other one. This paper proves the difference by constructing a new economic model. And in this process we discuss Real Business Cycles or Disequilibrium Dynamics.

On this occasion the concept of "conflict of egos" and "quality of labor" like entrepreneurship is important.

【本文に対する注意書きおよび今後の展望】

- ① 本稿のマルクス理解は、森嶋通夫の名著『マルクスの経済学』に準ずる。この本の中で、森嶋通夫は「集計量としての労働価値説」をマルクスとケインズを比較して、述べている。また、「必要労働」と「社会的必要労働」という「価値」の二側面についても言及している。（森嶋通夫氏がノーベル経済学賞をとれない原因は、マルクス経済学に深入りしすぎているからである、という人がいた。それならば、私もノーベル経済学賞を受賞するのも無理であろう。・・・これは、ほんの冗談です。）
- ② 消費空間がコンパクトな理由を数学的に証明せよと言われると、次のように説明できる。存在を距離空間とすると、有限な人間（有界閉集合な人間）の、有限な時間（有界閉集合な時間）の消費という連続写像の像、つまり消費可能集合は、コンパクト（有界閉集合）である。
- ③ 一般均衡解の存在証明において、飽和消費が存在すれば、一般均衡解は存在しないという事は、ドブリューの『価値の理論』を読めば、明らかに認識されていた事がわかる。しかし、一般均衡解の存在証明という結論の明快性及び、それに続いた、「新古典派」を一群の教科書からしか学んでいない「教科書派」により、現在では、飽和消費の非存在をどの教科書にも暗黙裏に仮定してある。このことは、私にとって、非常に不満であるし、経済学の将来に対して、大きな不安を感じる。このような意味で、本稿が一石を投じる事ができればと思う。ただし、マルクスも、飽和消費という面からすれば、このことには言及していない。（①で述べたように、「必要労働」と「社会的必要労働」の区別を行っていない。）このため、マルクスと「Say's Law」を結びつける人もいる。（飽和消費の非存在＝無限の消費こそが「Say's Law」の本質である。）
- ④ 「4. 6 貨幣観とスタグフレーション論」は、私の『資本主義の生成 ～封建制から資本主義への移行理論～』という論文の中の実証部分において利用されている。現在のデフレーションは、「パソコン」のように、取引量は減少せず、生産能力の拡大が消費量の拡大以上に速い事による。
- ⑤ 「上図の連続な順序同型写像、 $U_i \cdot P_i$ が存在する。（ $U_i \cdot P_i$ を「効用関数」と呼ぶ。）」という部分が本文の中に存在するが、従来は、「同効用曲線が閉集合」という仮定が置かれていた。数学的には、ドブリュー等が仮定した「閉集合」の仮定よりも本稿のように、「連続な順序同型写像」を仮定する方が美しいと感じると思うのだが・・・？「連続な順序同型写像の存在」とは、昔のユークリッド幾何学における一本の補助線のようなもの、現代的に言えば、Morse理論の変形である。
- ⑥ 本稿で述べた、「第2の労働（一般的にはプロセスイノベーションと呼ばれるものに対応する）」と「第3の労働（一般的にはプロダクトイノベーションと呼ばれるものに対応する）」が、会社等の組織において、積極的に行われるが、その社会に与える効果は、消費空間の食いつぶしか、拡大かという面からすれば、真反対の可能性がある。現在の、小泉政権の「構造改革」という言葉の中で、このプロセスイノベーションとプロダクトイノベーションの二つが混同されていないかどうかは、疑問である。
- ⑦ マーシャルが『経済学原理』のモットーとして、「自然は飛躍せず」という言葉を選んだのに対して、シュンペーターが、「人間の文化の発展、とりわけ知識の発展は、まさに飛躍的に生ずることを主張したい。」『理論経済学の本質と主要内容』と述べた事はよく知られている。しかし、シュンペーターが「飛躍」をモデル化できないが故に、「シュンペーター学派」を作ることができなかったのではなかったかと、私は思う。本稿においては、この「飛躍」を「消費空間の次元の深化」という言葉で表してみた。
- ⑧ 労働時間の下方硬直性に対して、最近、「ワークシェアリング」という言葉が流行っている。資本主義社会で、「ワークシェアリング」が難しいのは、教育の問題にあるのではないかと私個人は密かに思っている。それは、「有能な一人」を教育する方が、「平凡な二人」を教育するよりも、資本主義にとって「効率的」であるからである。
- ⑨ 私の『資本主義の生成 ～封建制から資本主義への移行理論～』という論文にも書いた通り、多元的生産様式の現在において、家族内の「自我の共同」・資本主義的「個」としての「自我の対立」・国家による「自我の統制」等の「自我の共同・対立・統制」の重層的構造の認識が重要である。そして、農耕社会における共同体・封建制下の「自我の共同」が一般的な場合の、「穀物は多ければ多い程良い」という社会と、資本主義社会のような「自我の対立」が一般的な場合の、「穀物は多すぎるとそれを生産する者の困窮を意味する」という社会の、「価値の逆転」現象をとらえることが歴史把握のためには必要である。